東京学芸大学　先端教育人材育成推進機構・外国人児童生徒教育推進ユニット　主催

2024「多様性が活きることばの教育実践」 第1回実践交流

概　要

実施日	2024 年 8 月 17 日(土)
参加者	対面　交流会参加:19 名 オンライン　講演会のみ参加:91 名
アンケート回収数	対面　交流会参加:19 件(100%) オンライン　講演会のみ参加:67 件(73.6%)

研修資料について
教育・研修を目的とした場で参照資料としてのご提示に留めてください。部分的な切り取りや、加工はお控えください。また、本事業資料である旨を明示してご利用ください。

プログラム

1　実践交流(対面)

1)事例報告

報告1　小学校における「JSL カリキュラム」の授業事例　　八王子市立由井第一小学校　教諭　千葉多恵子

報告2　NPO 法人メタノイアにおけるクルド人青年への支援

NPO 法人メタノイア　コーディネータ　赤澤聡子

2)参加者同士の実践の交流

実践の紹介(以下の 3 点について、具体的な資料を示しながら)　⇒　グループでの話し合い

1)取組(実践)の前の問題意識:子どもたち、あるいは教室の実態と設定した課題

2)取組の工夫:課題を解決するために具体的にはどのような工夫をしたか

3)結果:一定期間実施してみた結果、どうであったか

2　講演(対面・オンライン配信)

1)講演「つながる・うまれることば、繋生語を話す子どもたち」

ニューサウスウエールズ大学　教授　トムソン木下千尋

2)グループディスカッション

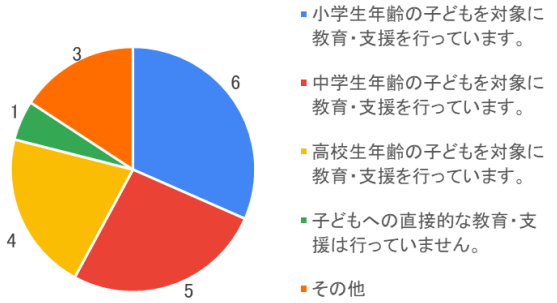
＜論点＞1　日本にいる文化間移動をしている子どもは、どんな言語生活を送っているのでしょう？

2　「母語・継承語」と呼ぶことと「繋生語」と呼ぶことで、何が変わるでしょうか？

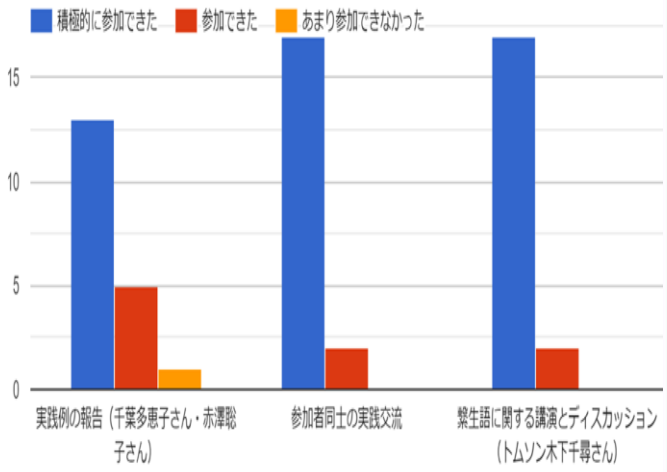
3　「繋生語」と捉えることで、教育・学習にどのような違いが生じる可能性がありますか？

アンケートより

〈参加者の子どもの日本語教育への関わり〉



〈積極的に参加できたか〉



全プログラムで積極的な参加がありました。ただ、千葉さん、赤澤さんに報告いただいた２つの事例２つの事例報告はたった 5 分と時間が短く、詳しくお話を伺いたかったという意見が多数ありました。企画側の反省点です。

参加者の声

●実践交流について（対面参加者）

“実践報告”となるとハードルが上がりますが、本日の1人 10 分程度の発表であれば、そんなにハードルが高くないのではないかと感じました。

言葉を学ぶ、言葉を教えるということを改めて考えることができました。普段の実践の中で疑問に感じることを振り返り、言語化することができ、次へのステップに繋げていけるような気がしました。これからも学び続ける教員でありたいです。

わたしは地域の教室で子どもと関わることが多いですが、公教育の現場（学校）の先生方との交流の機会がなかなかないため、地域を超えて交流できるとうれしいです。今回はその点でも貴重な時間となりました。

実践例の報告、実践交流、講演、とインプットもアウトプットもできる貴重な機会でした。わたしは対面で参加させていただいたのですが、対面ならではの学びが多かったです。新たなつながりもできてよかったです。

●講演について（オンライン参加者）

- 現在、ハワイで教えていますが、状況が似ていることもあり、非常に勉強になりました。また繋生語という考え方を伺い、いま自分の中で見てきた日本語や日本文化を伝えていく教育の輪郭がはっきりしたように感じました。ありがとうございました。
- 今まで日本語を教えるという視点でしか見ておらず、彼らのもつバックグラウンドまで考慮できていただろうか・・・と内省するきっかけになりました。思春期に差し掛かる子を多く持っていることもあり、アイデンティティにも関わる大事なトピックだと思いました。
- 子どもに日本語を必死に教え込もうとしている外国人保護者に、家庭では母国語を使うよう勧めるようにしてきたが、子どもが母国語に興味を示さないとの声を聞くこともあり、一緒に悩んでいた。今日のお話で「必ず戻ってくるので戻れる場所を作っておいて」と伺い、保護者に伝えて、一緒に長い目で子どもを見ていこうと思った。

研修企画者より

令和６年度は、日本語指導についての一定の経験を有する教育者（教員・支援員）の皆さんには、対面で、各々の実践について交流し意見交換を行う場を、次の趣旨で、研修として提供することにしました。

> 日本語教育・支援の現場は、子どもたちも多様（言語・文化背景、来日の経緯や滞日期間、ことばの力や認知・学力の発達状態）であれば、教育・支援現場も多様（地域の多文化化の状況、組織・団体としての考え方、日本語教育・指導の仕組み、人的配置）、そして携わる者も多様（立場・教育経験・教育観・言語指導の知識・技能）です。その現場で、教員・支援員の皆さんは、子どもたちがことばを豊かに運用する力を高めるため創意工夫をして教育・支援活動を行っています。その皆さんが相互に実践を語り合い・学び合う場がこの実践交流会です。
>
> 自身の実践について語り、具体的なアイディアを共有するとともに、その背後にある子ども観、学習観、言語観を交差させながら、次なる、実践を展開するための省察に基づく気づきと、アイディアを得る空間にしたいと思います。参加される皆さんが、次なる「子どもたち・現場・教員の多様性が活きる実践」に挑む契機となればと幸いです。

上記の意図で、実践事例の紹介のモデルとして、報告1の千葉さん、報告2の赤澤さんに実践事例の報告をお願いいたしました。参加者の皆さんからは、「日本語指導」「教科学習支援」「多言語・多文化交流」「地域支援」「教員研修」と多様な実践の紹介がありました。初の試みでしたが、ご自身の実践例の資料や紹介用のスライドをご準備くださり、大変活気のある実践交流となりました。ただ、時間が足りなかった、他のグループの実践の話も聞きたかったという声が多くあり、次回以降の運営上の検討課題となっています。

また、今回は、トムソンさんに「繋生語」についてご講演をお願いしましたが、海外からも多くの方がオンラインで参加くださいました。アンケートには、「母語」の捉え直し、言語・文化教育の意味の問い返しが見られ、皆さん、子どものことばの教育に関し、その社会的な価値、対象の子どもが置かれた状況における意味について深く考える機会にしてくだっさたようです。新しい見方・考え方、情報を学びたい・知りたい、そして、自身の教育活動を省察的に捉え直したいという意欲に、大変頼もしくうれしく感じました。